日本語を第二言語とする幼児のスキーマ生成による言語構造の構築
－第一言語習得との異同を探る－

橋本　ゆかり

学位取得年月：平成20年3月
取得学位名：人文科学博士
学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】動詞形（テンス・アスペクト、否定、可能）、　助詞、　　固まり、　スロット付きスキーマ、　Usage-based Model

【要旨】

近年日本語を第二言語(以下、L2)とするL2幼児が増えつつあり、将来的言語支援を考える上で、L2幼児がどのように言語構造を構築していくのかを明らかにすることは大切である。

海外の第一言語(以下、L1)・L2習得研究では丸暗記の固まり習得が報告されている(Hakuta 1974；Wong-Fillmore 1976等)。固まり表現には完全な固定表現(例 How are you?)とスロット付き表現(例 Can you __?)の2種類があり、固まり表現が文法ルール獲得に繋がるのかについては見解が分かれている(Krashen & Scarcella 1978等)。Usage-based Modelの立場をとるTomasello(2003)は、1語をピボットとして多数語と結びつく現象を「ピボット・スキーマ」生成によるとし習得の1段階に位置づけた。日本語の習得研究では、固まり習得の指摘があるものの、どのように言語習得へ繋がっていくのかについて明らかにされていない。本研究では、L2幼児の習得プロセスを明らかにしつつ、①固まり習得との関係、②何を中心に、どのように知識の組織化が進んでいくのか、③L1とL2習得に違いはあるのかという3つの観点から検討することを研究課題とした。

研究方法は、L2幼児(英・仏語母語)3名の幼稚園での自然発話を縦断的に収集し記述的・数量的に分析した。L1幼児2名の発話も収集し対照データとした。

STEP Iではテンス・アスペクト形式(研究I・II・III)において検討した。研究I・IIは「アスペクト仮説」の傾向がみられるのかについて分析しプロトタイプから習得されるという普遍的部分を確認した。さらに可変的部分が固まり習得に起因することを明らかにした。研究IIIでは言語構造構築メカニズムの特徴について、1) L2幼児は、即座のコミュニケーションの必要性、日本語の体裁を保ちたいという意図、認知的に発達していること、母語の知識を生かせることに起因し、「ボトムアップ的な暫定的ルール」、つまり卓立性のあるユニットをピボットとした「スロット付きスキーマ」(動詞+□、□+接辞)を早期に生成する、2)「スロット付きスキーマ」の合成により動詞形が作られる、3)意味・形態面において修正を行い「スパイラル型」に習得を進める、等を仮説として提案した。STEP IIで否定形式(研究IV)・可能形式(研究V)において仮説を検討し妥当性を得た。STEP IIIで助詞(研究VI)において仮説の拡大適用を行い、助詞にも「スロット付きスキーマ」が生成され文構造が構築されることを示した。最終的に言語構造構築モデルを提示した。またL2幼児は、L1幼児よりも習得段階が1つ多く、これは音韻的特徴からスキーマ生成が可能なL1幼児と比べ、L2幼児が、普遍的な語結合の手法を熟知していることから、そこまでのスキーマ生成を意味に基づいてスムーズに行ってしまうが、さらにそこから膠着し融合した形態を獲得する迄にインプットと照合する段階を経なければならないことに起因すると述べた。

本論文では、固まり習得を基点とした「スロット付きスキーマ」(橋本2006)による言語構造構築メカニズムの特徴を明らかにし、L2幼児の習得プロセスがL1幼児と類似しながらも異なる側面を有することを指摘した。理論的貢献としてL1だけではなくL2習得、そして日本語でもUsage-based Modelが有効である可能性を示した。

（はしもと　ゆかり）